

(専門試験 少年補導職員)

**No. 1** ワイナー (Weiner, B.) の帰属理論に関する次の記述のうち妥当なのはどれか。

1. 人は自分の属する集団が共有する価値観や規範に無意識に影響されて態度や行動を決定するとした。
2. 目標達成に対する努力の程度は、目標達成への期待と目標の価値との関数として捉えられるとした。
3. 有能性、自律性、関係性という人のもつ主な三つの欲求によって動機づけが決定されるとした。
4. 成功と失敗に関する原因を内的・外的などの複数の次元で分類し、そのうちのどこに原因を求めるかによってその後の動機づけの程度が異なるとした。
5. 人は行動の原因を外部の状況要因より行為者の内部要因に帰する傾向があるとした。

**正答番号 4**

(専門試験 少年補導職員)

**No. 2** 論国による貧困対策の最近の動向に関する次の記述のうち妥当なのはどれか。

1. 生活保護基準は、物価の動向や地域差などの影響を調整するために、平成25年度から平成27年度までの3年間をかけて段階的に引き上げられている。
2. 「生活困窮者自立支援法」に基づく「住居確保給付金」は離職者を対象にして、平成24年度から支給が開始されている。
3. 医療扶助の適正化などを目的とした「生活保護法」の改正により、平成23年度の医療扶助費は前年度比で減少した。
4. 教育支援や生活支援など子どもの貧困対策の実施を国及び地方公共団体の責務とする「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が公布された。
5. 10年間の時限立法である「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」は、全国調査でのホームレス数の減少に伴い廃止された。

**正答番号 4**

(専門試験 少年補導職員)

**No. 3** 論家族を巡る社会学的研究に関する次の文中のA～Dに入るものがいずれも妥当なのはどれか。

19世紀末から20世紀にかけて、イギリスのヨークにおける労働者家族の貧困問題を調査研究した  は、研究の過程で、労働者家族の一生は  を基準に浮沈するものであることに気付いた。このように、人は一生の間に経済的浮沈を繰り返すという視点は、後に、家族が各段階においてたどる標準的な経緯という視点を成立させ、このような見方は  と呼ばれることになった。

一方、近年、家族の共通性に着目するより、おのおのの家族と個人の個別性・固有性に着目する必要性が生じてくる中で、人間の一生を  として捉える見方も生じている。

A	B	C	D
1. ブース	QOL	ライフサイクル	ライフコース
2. ブース	貧困線	ライフコース	ライフサイクル
3. ラウントリー	QOL	ライフコース	ライフサイクル
4. ラウントリー	貧困線	ライフサイクル	ライフコース
5. エンゲルス	貧困線	ライフサイクル	ライフコース

正答番号 4